

# 「律法は罪を示し主に導く養育係」

## ローマ7：7－13

堀田修一 23・4・30

### I 律法の役割＝私たちに自分の罪を示すこと

1. 「律法は罪なのでしょうか。決してそんなことはありません。むしろ、律法によらなければ、私は罪を知ることはなかったでしょう。実際、律法が『隣人のものを欲しがってはならない』と言わなければ、私は欲望を知らなかったでしょう」：7。私たちが罪を自覚し、罪が何であるかを知るためには、律法は不可欠。「律法とは何でしょうか。それは、約束を受けたこの子孫（救い主キリスト）が来られるまで、違反を示すためにつけ加えられたもの」（ガラテヤ3：19）。
2. パウロが罪を知った証し→「実際、律法が『隣人のものを欲しがってはならない』と言わなければ、私は欲望（という罪）を知らなかったでしょう」：7。パウロは律法の専門家で、誰よりも外側の行いとしては、律法をきちんと守っていた→「律法についてはパリサイ人、その熱心については教会を迫害したほど（現在のR国、C国、K国他もこれまでの歴史の中の国々の指導者も、自己保身のため、自分の絶対的な支配の権力を邪魔する者を迫害し、獄中に入れ、殺しさえる。しかし、パウロの迫害は、動機が違った。彼は、人となられた主イエスを神と信じることは、十戒の第1戒の「あなたには、わたし以外に、ほかの神があってはならない」（出エジプト記20：3）に背く罪と本気で信じて、クリスチャンたちを迫害したほど）であり、律法による義（心ではなく外側の正しい行い）については非難されるところがない者でした」（ピリピ3：5，6）。つまり十戒の9戒まで＝①「あなたは、わたし以外に、ほかの神があってはならない」②「あなたには自分のために偶像を造ってはならない」③「あなたは、あなたの神、主の名をみだりに口にしてはならない」④「安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ」⑤「あなたの父と母を敬え」⑥「殺してはならない」⑦「姦淫してはならない」⑧「盗んではならない」⑨「あなたの隣人について、偽りの証言をしてはならない」までは、パウロは、完璧に律法、十戒を守っていると本気で思っていたのです。神の本当の意図は、これらの戒めは、行いだけではなく、動機も心も含むものでしたが、ユダヤ人もパウロも外側の行いが正しければ、神の戒めを守っていると思い込んでいたのです。ところが、偉大で聖く愛の神は、10番目の最後の十戒は、心の欲望を禁ずる律法をすでに旧約時代から民に与えておられたのです→「あなたの隣人の家を欲しがってはならない。あなたの隣人の妻、男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを欲してはならない」（出20：17）。この十戒のまとめとしての10番目の戒めには、行いの禁止はいっさいないのです。他の人のものを「欲しがる、心の欲望、むさぼり、欲情、貪欲、神が与えておられるものでは満足しない欲張り」、つまり、外側の行いではなく、心の欲を制するように命じられている。パウロは、完璧に神の律法を守っていると自信を持っていたが、主に出会い、御聖霊が働かれ、自分には、他の人のものを欲しがる欲望の罪があることを神に知らされたのです。※私の証し。私も、この十戒の戒めでも、十分、自分が罪深いと自覚します。と同時に、私が、主と聖書に出会い、御聖霊により自分の罪を深く自覚させられたのは、次のみことばです→「殺してはならない」…とあなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に対して怒る（怒り、恨み、憎し

みは心の中での殺人の罪を犯している）者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に『ばか者』と言う者（実際に人を殺さなくても、人を見下げる態度、言葉で傷つけることは言葉の殺人者）は最高法院でさばかれます。『愚か者』と言う者（人をさげすむ殺人、人を愚か者という言葉で傷つけることは言葉による殺人）は火の燃えるゲヘナ（地獄）に投げ込まれます」（マタイ5：21，22）。私は、御聖霊とみことばにより自分の罪が知られるとき、私の罪の身代わりの刑罰の主の十字架が私には、どうしても必要と心から分かったのです。それから、次の自覚も生まれた—主を十字架につけたのは、私の罪です！「罪の（自覚の）増し加わるところに、恵みもみちあふれました」5：20。

Ⅱ 律法は聖なるもの、正しく、良いものだが、私たちの心に罪があるので、律法により私たちの罪の欲望が引き起こされる。律法が悪いのではなく、私たちの心の罪が悪いために起こる事実。「私たちが肉（罪の性質の奴隷）にあったときは、律法によって目覚めた罪の欲情が私たちのからだの中に働いて、死のために実を結びました」：5。「（私たちの心の）罪は戒めによって機会をとらえ、私のうちにあらゆる欲望を引き起こしました。律法がなければ、罪は死んだものです。私はかつて律法なしに生きていましたが、戒めが来たとき、罪が生き、私は死にました（いのちの神から離れた）。それで、いのちに導くはずの戒めが、死に導くものである（戒め、律法では救われない）と分かりました。（私たちの心の）罪は戒めによって機会をとらえ、私を欺き、戒めによって私を殺した（真の救いではなく滅びに至らせる）。…この良いもの（律法）が、私に死（神との交わりを断つ神との分離、永遠の滅び）をもたらしたのでしょうか。決してそんなことはありません。むしろ、（私たちの）罪がそれ（死、神との分離、永遠の滅び）をもたらしたのです。（私たちの）罪は、この良いもの（律法）で私に死（永遠の滅び）をもたらすことによって、罪として明らかにされました。（私たちの）罪は戒め（律法）によって、限りなく罪深いものとなりました」：8—13。律法が悪いのではなく、私たちの心に罪が満ちているので、私たちは自分の力では決して律法を守れず、主の救いがなければ、ますます、律法を聞いても、罪深い者となって行くのです。

### Ⅲ 律法の真の役割とは？

「律法は私たちをキリストに導く養育係となりました。それは、私たちが信仰によって義と認められるためです」ガラテヤ3：24。

1. もし神が、旧約聖書、律法、戒め、十戒を与えておられなければ、私たちは、自分の罪、自分の力では、神の律法、戒めを完全に守ることは出来ない弱さを徹底的に理解することは出来なかった。律法により、自分の罪と自分の力で神の律法を守ることが出来ないと分かり、律法は、キリスト、救い主の必要性を徹底的に教え真の救い主キリストに導く養育係となったのです。
2. 旧約聖書、律法、戒め、十戒がなければ、律法を自分の力で守り、救いを自分の力で獲得することが不可能だと分からず、新約時代の主イエス様を信じる信仰による救いのありがたさが実感できなかったでしょう。今も、旧約聖書、律法は必要。主の十字架の死のいけにえの恵みと主の復活による新しいいのちと力をいただく恵みを実感し感謝するために。旧約聖書なしに新約の恵みは分からない。

3. 私たちは、主の十字架と復活の恵みによる救いをいただいているので、神に救われる「ために」律法を守る必要はなくなりました。しかし、神の一方的な恵み、賜物により、主を信じる信仰により救われているので、神に感謝し、神を愛し、隣人を愛する「ために」、旧約、新約聖書の神の戒め、御霊の愛と力で、みことばに生きるのです。「愛をもって互いに仕え合いなさい。律法全体は、『あなたの隣人を自分のように愛しなさい』という一つのことばで全うされるのです」ガラテヤ5：13，14。

励まし：最後に、二つの人生を考えてみましょう。一つは、「自分の力で神の律法を一生懸命に守る努力をして救いを得ようとする人生」。もう一つは、「律法を自分の力では完全に守ることが出来ないと認め、律法を完全に守られた主イエスを救い主、神と信じる信仰により救われ、感謝しつつ、みことばに生きる人生」。この二つの人生で、結果的に、神の律法、戒め、みこころ、みことばを喜んで守るのはどちら？  
それは、律法を自分の力で守る人生ではなく、主を信じ、主と共に生きる人生です！  
ハレルヤ！